

[論文]

核兵器—偽りの希望と真実の黙示録：

『核の異端に直面—変革の要求』（C. チャップマン）¹に関する
神学的・倫理的考察

マーチー・デイビッド

翻訳者：野村 信

1. 全滅の危機への応答

数年前に、Noam Chomsky は、核戦争は人類にとって気候の変動よりもはるかに深刻な脅威であると論じた。彼の言葉で言えば、「グローバルな核戦争の結果もたらされる大惨事は増大しつつある気候変動をはるかに超えている。なぜなら結果は即座に現れ、取り返しがつかない。両者の相違点は、気候変動は避けられないが、グローバルな核戦争の脅威は我々の手で取り除けるという点にある」（Chomsky, *Interventions*, 126-27）。他の人々も不吉な脅威に警告を発しているが、世界全体で言えば、核兵器の危険は現代生活における許容範囲内にあると考え、核による全滅の縁に心理的にも道徳的にも適合して生きているように見える。かつて初期の段階で、アインシュタインは、「原子核の力を解放することは、私たちのものの考え方を除いて、他のすべてのことを変えた」こと認め、さらに彼は、「人類が生き残るためには本質的に新しい考え方が要求される」（Chapman, 11）と語った。牧師であり活動家の Martin Luther King, Jr. は、人類の選択は「もはや暴力か非暴力」ではなく、むしろ「非暴力か非生存」であると語った（Chapman, 10）。神学的な用語では、Dale Aukerman が核戦争を「『出発時点で殺人兵器』である全滅の一発」として描いており、それは、いわば「エデンの園のサタン」のようである（Chapman, 227）。非軍備提唱者の Barb Katt は、市民の不服従に対する連邦政府の判決が下される前に論じるべき点について、そのジレンマを以下のように表明する。

私たちのほとんどが自分たちのために監獄を建てている。しばらくの間それを占拠し

¹ G. Clarke Chapman, *Facing the Nuclear Heresy: A Call to Reformation* (Brethren Press, 1986).

ているうちに、監獄の壁に慣れ、命は守られている、と偽った前提を受け入れる。そのような信仰が私たちを支配するやいなや、私たちの生活を良くしようという希望は捨てられ、機会があれば実現するという夢を持つことをやめてしまう。私たちは生きたまま死んで行き、平凡な灰色の世界が広がる中で、破壊に向って進んで行く群れになる。

II. 宗教としての「核抑止力主義 *Nuclearism*」

核戦争によるハルマゲドン（世界最終戦争）への行進は、核兵器それ自体がその運動を引き起こした。その運動は、政治的に、経済的に、道徳的にも、人間の全生涯を支配する力をもつにもかかわらず、なんら大きな反対を引き起こさなかった。「核爆弾（本旨を良く表すアイコン）」は単に国家の安全に関する事柄として扱われてよいものではない。それは一種の宗教、すなわち、全人類にとって「核抑止力主義」と Robert Jay Lifton が呼ぶ、一つの宗教になった。

長年にわたって、核兵器の存在と使用は第一に倫理的・道徳的問題として見られた。しかし数年前に G. Clarke Chapman は、キリスト者が核兵器を宗教的、神学的な問題から見ることの失敗を指摘した。このような大規模破壊兵器が急速に広がるに連れて、問題の宗教的な性質がより明らかになりだしたからである。自己神格化の巨大な力は、非聖書的な救済論を増幅させた。さらに、核の大量破壊のもつ全部を取り囲む、黙示的な性格は Nevil Shute の「渚にて *On the Beach* (1957)」のような本において脚光を浴び、「異常愛博士：私はいかに悩むことを止めて爆弾を愛することを学んだか *Dr. Strangelove or: How I Learned to Stop Worrying and Love the Bomb*” (1964)」のような映画で上映された。核兵器は概して現実への攻撃として広く認識され受容されるようになり、核兵器の使用の結果が、かつてなかった軍事的行動に関わる最終の感覚を生み出したのである。

核抑止力はすべてを包み込む一種の宗教的幻想である。その力はあまりにも広大で、「存在全体 (reality as a whole)」に影響する。「核爆弾」の影響は、内部的、超越的破壊を引き起こす規模をもつ。なぜなら「核爆弾」によって引き起こされる瞬時の大規模破壊は、何世代にも亘る放射能汚染をもたらすからである。「核爆弾」が人類全体にもたらす影響は実際測り知れない。それなら、「核爆弾」の性格を「全体主義者」として表現することは決して誇張ではない。「核抑止力」の影響は、その宗教的な様相が否定されないという点で究極的・全体的な性格を帯びる。核爆発が人間を殺戮し、損なうばかりでなく、生態系へ深刻な被害をもたらし、その存続を脅かす。例えば、核戦争が起きれば、生じる一つ

の可能性は、「核の冬」の到来である。すなわち、爆発後に煤塵と煙が地球を覆う期間である。数か月、数年の暗黒が広がり、凍りつき、飲料水が供給されず、植物が死に、猛毒の放射線 B が放出され続ける広範な汚染である。そのような、予防できるはずの大災難がもたらす帰結は、人間の死よりもはるかに深刻である。すなわち人類絶滅の恐るべき可能性を秘めているからである。そのような情景はキリスト者が聖書において読む黙示録の象徴的な描写によって知られるが、しかし、続けて、決して神が人間に命じた努力でも主体性でもないことを認識すべきことは付加せねばならない。ことは付言せねばならない。例えば聖書は、人類消失の危険を冒すような神学的・倫理的な行為を命じてはいない。イエス・キリストの死と個人のクリスチャンの殉教という死は、祝されてきたが、この祝福は将来の復活と和解の希望の脈絡内で起こるものである。核兵器を用いて人間が自ら消失することは何ら目的も明確さも持ち合わせない。

文化的にも、おそらく霊的な意味でも必ずしも明確ではないが、黙示録は何世紀にもわたって人々を魅了し、現代も例外ではない。Chapman が指摘するように、この傾向は、神秘と恐れに関する自然的、人間的感覚と大いに関連すると見られ、未知の不可視な勢いや巨大な力に関する想像的な世界を好むという傾向、宇宙的天罰に直面して被造物が助けられないというイメージに魅了されるという傾向がある。現代社会は、長い間、宇宙人の侵略のファンタジーや夢などを製作してきたマスメディアによって氾濫し、日常生活で感情的にも知的にも受け入れられ、核兵器の背後にある宗教的な現実を曖昧にしている。Jürgen Moltmann は、核兵器を「人類史上最悪の神聖冒瀆」と語って、問題の宗教的な性質を察知した。実際、そのような兵器を考案した人々は、嫌でも人間性そのものを問われることは避けがたく、付与としての命に対する人間の責任や人間の尊厳への違反が問われる。倫理学者の Gibson Winter は個人と社会の死の問題に関して道徳的にも宗教的にも中立的立場に立つとして、自分たちが決定権をもつとする技術的なエリートたちに極めて批判的である。Winter は、彼らの世俗主義が自分たちの「核依存」の信仰をこっそり隠していることを指摘する。なぜなら彼らは自分たちの根本姿勢と宗教的性格を批判に晒すことをわざと避けるからである。「核抑止力主義」の信奉者たちが見誤り、認めることを拒否する点とは、神が本当に我々の起源であり維持者であるなら、存在物を消滅させるいかなる脅威も宗教的な脅（おど）しであるという点である。Richard Barnet 曰く、私たちの唯一の解決は、何としてでも破滅へのこのレースを乗り越えるしかない、と。他の人々（心理学者や科学者、教師、政治家）も同様の意見をもつ。しかし、いかなる修正意見も「全体的・究極的」であることが不可欠である。宗教的・神学的立場からは、「核爆弾」を神

と人との根本的な結びつきへの挑戦であると思つめ、また「核爆弾」を神が造られた世界の管理者であるべき人間たちのはなはだしい誤りであると思つて取らねばならない。

人類の消滅は、人間の暴力の中でも、最悪の、虚無的な位置を占める。最も基本的な点で、暴力は、自然に形作られ、全体に安定した何かに対して力をもって破壊することである。目的によっては暴力が時に許容される場合がある。例えば、外科の手術の場合に、外科医のナイフによって「強引な暴力」が脅威を与える細胞を切り取り、破壊することで、延命が可能になる場合である。しかし、この場合には、暴力を加える側と加えられる側が暴力行為の価値を認めているからである。これは明らかに戦争の場合には許容されない。そこでは暴力行為に現れる力が、それ自身破壊的で、撃滅させ、非寛容で、虚無的な力でさえあるからだ。

「核爆弾」は、現代社会で単に人間を守るという高度の技術の戦争の手段にとどまらない。その存在に関する議論がすべてに亘って一致するというのではなくても、「核爆弾」は、我々の社会的、政治的、経済的構造の中で引き続き、改良され、存続している。人間の生命という面から言えば、「核爆弾」は、触媒作用的、寄生虫的な面をもつ。それが、極端な意味で、途方もない虚無的な想像や哲学に貢献するように、同じく独占的な資本主義の本当の姿を浮き上がらせる。つまり、歯止めない人間の欲望であり、すなわち、かつては死の罪に働いていたのに、現代の資本主義社会において、世俗化された経済的美徳となった人間の欲望である。にも拘わらず、意識しようがしまいが、「核爆弾」の触媒作用的、寄生虫的機能は、蠟燭の炎に引き寄せられ、まわりでぐるぐる回り続ける蛾に似て、結局自己破壊的である。Chapman の言葉で、「人間は自分たちを破壊するその武器をあまりに熱心に求め、これに仕えている」と (20)。

キリスト者たちからは預言的な警告がほとんどなされたことがない。残念ながら、今日のキリスト者たちは、生命と創造世界の管理者としての私たちの責任を放棄して、「核抑止力主義」とその脅威を嘆かわしくも広く受け入れているように見える。アダムとイブが管理を委託された点を越え、自身のためのより大きな能力を求めて、禁じられた果実を取って食べたというあの経験に奇妙にも通じるものがある。21世紀の技術的渇きはアダムとイブの禁じられた果実ではないだろうか？ 最初のカップルはエデンから追放されたが、20世紀の人間の共同体は無責任の結果としてすでに酷(ひど)く損なわれた「庭」から爆発〔の危機〕に直面しているのではないだろうか。もし私たちが21世紀の世界からそのような爆発(すなわち絶滅)を避け得るなら、我々を絶滅の危機にさらしている力に頼っている人々に強い警告を発しなければならない。そのような警告は、現代の女性や男性の

心に届き、さらに「核抑止力」の神話から解放する、シンボリカルな表現を用いる明確な言語によって伝えられなければならない。この議論に関して有力な声をあげている一人は、Robert Jay Lifton であり、広島で生き残った人たちを 1962 年に研究したことで知られている。短く Lifton の「核抑止力主義」に対する批判と核から生じた神話について触れておこう。

Lifton は、人間が死と不死を扱う作業に関わる道は五つあるとする。最初は、誰もが生物学的に、死と不死の問題を扱う。すなわち私たち自身は子供や子孫によって生き続けると見る。第 2 は、私たちは宗教的に、死を越えて生き続けると考える。様々な儀式を通して福音的に私たちの信仰を告白し、死後の世界も生き続ける仕方である。第 3 は、私たちが行為や作品によって創出的に、死を越えて存続するという見方である。つまり、芸術作品や科学的発見、人類への貢献、他に残せる遺物などによって歴史的に存続しようとする仕方である。第 4 は、永続すると見られる自然の一部であると自然的に、私たち自身を見て、死を越える方法である。例えば何人かの広島の生存者は、「国家は滅びようとも、山や川は残る」という思いから慰めを得た。第 5 は、人々は自らの生を内的な超越によって、越えようとする姿勢である。ドラッグや瞑想、ある種の恍惚を意図的にもたらすよう工夫するやりかたである。これらのすべての方法は、我々の生を延ばし、より良く生きる感覚を身につけたいという要求を象徴化する主張である。現代において、これらの最初の四つの実践（生物的、宗教的、創出的、自然的）は、著しく減少している。Lifton によれば、このように減少すると、人間個人を完全に支配することを求めるイデオロギーによって満たされなくなる無意識的な真空状態を作り出してしまおうと言う。換言すれば、Lifton が呼ぶところの「イデオロギー的全体主義」は、個人を全体的な理想の組織に服従させようとする。つまり、ファシストや他の全体主義的組織である。これに関連して、スケープ・ゴートは、その構造を養う手段か、正当化する手段になる（例えば、カール・マルクスに対して西洋とキリスト教からの肉体をもった悪魔としてさげすむとか、オサマ・ビン・ラディンへの米国政府の恐怖など）。現代的にブレンドされた激昂と霊的感覚の麻痺とが混合し、イデオロギー的要求へのこのような服従は、大規模攻撃の遂行の組織化と実行を刺激している。このようにして、現代社会において、死と傷つきやすい人間の不安に対して全体主義は偶像的な解決を提供する。

全体主義が〔近年〕新たに究極の高さに達したのは、1945 年における核技術の幕開けにおいてであった。先に触れたように、Lifton はこれを「核抑止力主義」として論じており、これは、この社会的政治的状態の宗教的な性格を照らす究極性と全体性を示す言葉なので

ある。Lifton は次のように語る。

「核抑止力主義」とは、死の不安の解決として、また不死の感覚の喪失の回復の道として、核兵器を装備したいという情熱なのである。「核抑止力主義」は一つの世俗宗教であり、「恵み」とまさに「救い」—死と悪の支配によるが—新しい技術的の神性の力を通して達成される全体的なイデオロギーである。この神性とは黙示的な全滅だけでなく、無限なる創造が可能であると理解される。核の信奉者あるいは「核兵器主義者」は、彼の神性の美徳を強いて解釈した力と感覚を自らの内に所有する。彼は世界の進行を保つために武器に依存しているのだろう。

Lifton が説明するように、「核抑止力主義」とは、死の不安と救いと不死への関心を備えた宗教として機能していることである。この点に関して、原子爆弾の「アラマゴルド実験 (the Alamagordo test)」の初期の目撃者によって使われた言語の宗教的な性格を指摘できる。その一人の William Laurence は、その実験を以下のように描写する。

この時、永遠が首を吊った。時間が静かに止まった。空間は一点に縮まった。地は開き、天は割れた。人は「世界の誕生」を目撃する特権を得たかのように感じた……巨大な音が大閃光の後に数百秒鳴り響いた—新しく生まれた世界の産声であった。

興味深いことは、Laurence はさらに、その出来事を目撃することと、キリストの再臨を目撃することとを比較しているのである。

「核抑止力主義」というイデオロギーは、神（不死の創始者）を偶像崇拜の、恐らく消滅か全滅かのどこにでもある恐怖によって置き換える。〔聖書で〕預言されている消滅から逃れられないので、人間は「喜ばしい」、あるいはスリリングな出来事として全滅を描く文化的宗教的神話を通して消滅の不安を克服しようと企てる。それは、「異常愛博士 (Dr. Strangelove) —いかに私は悩みを捨て、爆弾を愛することを学んだか」という映画などに見られる。「核爆弾」は社会の宗教的インフラ（下部構造）のための愚かしい偶像的代替物となった。「核抑止力主義」は、〔神に〕服従しそこなった人々にとっては黙示的書物と悲しい運命が備えられ、即座の服従の要求と、黙示録的崩壊（神への服従不在）の恐怖とを結びつける。多くの人々にとって、「核爆弾」は、聖餐、洗礼、礼拝、讃美、感謝といった全体の、象徴的な宗教行為を通して受領した、かつての滋養に取って替わる、究極の、

全てを包括するシンボルになった。「核爆弾」は、瞬時の全滅か、見えず、触れない放射能によって引き起こされる緩やかな肉体的崩壊をもたらす、形容しがたい腐敗に対する、言い知れぬ不安によって、〔聖書的〕伝統的豊かな養いを置き替える。(不気味な瞬時の全滅の様子を思い浮かべるには、広島で被爆した人の皮膚のくずれを見れば一目瞭然だが、壁の近くにいた人の「影」は雄弁である)

まさに「核抑止力主義」は現代の最初の「原理主義」となった。その「原理主義」は、偶像化された技術と科学の産物である。これを崇めることは、それらが人間に適切に仕えるための道具的機能から、ひどく離れた状態に達したことになる。その状況とは、数年前にフランスの倫理家・Jacques Ellul が『技術社会』の中で鮮やかに描き出した。

社会的・個人的な立場から見れば、「核爆弾」の主な利点の一つは、心理的・道徳的ダーウィン主義である。すなわち、精神的・象徴的に「最も適合したものの生き残り (survival of the fittest)」であり、これは人間を空の、あるいは無気力な感覚へと導く「心理的麻痺 (psychic numbing)」に至らせるからである。Lifton は、この進展を「心理的麻痺」として言及する。例えば彼の「広島の生存者」研究において、Lifton は、彼が調べた人々の中に、緩やかな絶望、慢性の抑鬱、「生存空間の減少」の感覚を見て取っている。そのような現象は、壊滅的状况下では驚くに値しないが、核兵器による破壊の考えを伴う全滅のおそるべき事例から来る感覚と意識とに拘らない、大災害の中で生きている。後者の場合に、Lifton は、そのような感覚は実際には全滅の可能性の現実を心理的に拒否すると示唆する。人間として、結果を見るまでもなく、私たちはそのようなトラウマを抑えるものだ。Chapman の言葉で言えば、「この『麻痺すること』は、普通の人間の進展を衰弱させるのであり、それ自体は『生における死』のミニチュア版であり、自己の死の象徴であり、『感覚の失われた知識』である」。

他にも「核抑止力主義」の提唱者らによって使われるある種の言語的否定がある。それは「核兵器用語 Nukespeak」と呼ばれるものであり、核兵器の議論の際に使われる直接的な技術用語を、言語上和らげようとするものである。例えば、広島に落とされた原爆は「少年 (Little Boy)」であり、長崎の原爆は「太った男 (Fat Man)」とう具合に、それが引き起こす大虐殺の現実を巧みに曖昧にする。ロナルド・レーガン米国大統領は、厚顔にも恐るべき MX ミサイルを「平和維持者 Peacekeeper」と名付けた。非情な技術用語は、恐るべき目的と核兵器の影響を隠すようにされた。例えば、TitanII ミサイルと9メガトンの弾頭は、「再稼働施設限定破壊用 potentially disruptive re-entry system」と呼ばれている。この種の言葉は、一般に大規模破壊のシンボルと結びつくイメージや感情を抑え、そ

らすために政府が考えだしたものである。Lifton はこれを「言語的解毒」と言い、直接それらを指さないで、核兵器を論じる場合の間接的な手段としていると語る。そのような用語は、核戦争が合理的に統制され、その拡大が抑えられるという幻想を生む。すると、核戦争の結果は予測され、そのような攻撃からの回復が可能で、核戦争の戦略は論理的であると、人々は攻撃中に冷静になって見ると暗に示唆する。これらの核兵器の性質と影響を否定することと並んで、さらに他のタイプの否定がある。すなわち、政府の取り組み中による、慢性的な秘密の、いわゆる婉曲的、オーウェル流の二枚舌である「国家の安全」のために、という報道によってである。

III. 核抑止力主義への宗教的な批判

「核抑止力主義」内で継承されている奇妙な否定の取り組みは、その主義が明確に宗教的な性格をもっているにも拘わらず、キリスト教のような啓示宗教に対して反対の立場をとる。使徒パウロによって語られたキリスト教の「奥義」は、「啓示された」奥義であり、核兵器の提唱者によって要求された「恒常的な秘密」ではない。彼らは核兵器の恥ずべき性質とその実行に関していかなる「啓示」をも妨げようとする。Ira Chernus が指摘するように、核による大量殺戮（たいりょうさつりく）の普遍的なイメージによって引き起こされる心理的麻痺は、核戦争に関する現代の考えを支配する多くの神話上のイメージを通して宗教的に滋養される。Chernus は、以下のことを核戦争で今日の人々を支配し、支配できる神話上のイメージとして示唆する。すなわち映画や空想科学小説などで登場する神話である。すなわち、廢墟の世界から新しい社会を建てるために立ち上がる「生き残ったヒーロー」たちの神話である。「全人類滅亡」の神話では、人々が一瞬で、痛むことなく死に、ドラマティックに、ファンタジーのように、母の胎に戻り、あたかも無の世界において自意識の中にディオニソスが現れるごとく登場する。また運命神や運命女神の神話では、近づく終末以前は人間は無力なものとして描かれている。そのような終末に対しては、人は何もなし得ず、ただ来るべきものを受け入れるだけである。

このような神話の危険性は、多くの人に戦争を肯定させ、むしろ何人かには魅力的ですらある。最終局面に達すると、私たちは夢物語や他の子供じみた考えへ至るように促される。神話は慰め程度のものでしかない。しかも、知的精神的に裏切った偽りの慰めである。実際、核戦争後の世界を最もよく予告した描写は、核兵器使用による全体的、最悪の影響を変装させたがる、騎士道ぶった予告を支持しない。例えば、かなりの数の人々が核戦争の最初の一撃で死んで行くだろうが、しかし大多数は、ゆっくり苦しみながら死んで行く

のであり、宇宙的無の世界に人間たちが、直ちに、熱狂の内に解放されるようなことはありえない。

それゆえ、世界社会へ「新たに誕生する」などという考えはばかばかしい。廃墟となった後に私たちの助けとなるインフラ（下部構造）が回復することなど、もはやありえない。生存に最も必須の基本的なものが手に入ったとしても、難しいことである。生体系の崩壊は現実的な可能性を帯び、食糧は不足し、黙示的核の冬が始まる。絶望の中にある人々はわずかな資源をめぐる争うだろう。要するに、「核抑止力主義」の神話論は、人間生活を豊かにしている様々な物を養う「豊穡神話（effective myths）の前で「神話」としての役割を終えるであろう。「豊穡神話」とは、深い感性と勇気と豊かな生活を養うシンボルである。核戦争に関する神話はそのようなシンボルを養うものをもち合わせない。

IV. 理性主義の失敗と積極性の役割 核兵器の廃止における神話のイメージ

たとえ「核抑止力主義」が非理性的であっても、その秘めた力を認めないわけにはいかない。おおよそ70年も続いているからである。Chapmanが辛辣に語るように、最後には「人々は自己破壊を……意味が分からないことよりも好む（32）」と。まだ起きていないことを理性的に理解することはきわめて難しく、人間の心と感覚を破滅的、神話的な力へと向かわせる。これらがもたらすイメージは一種の気晴らしであるが、しかし、本当の黙示的世界を、核兵器の使用で思い描くことをやめるという行為を抑えることが出来なくなる。究極的に、増大する「核抑止力主義」の問題を解決しようとしても、その実体を理性的に把握することが出来ない。核による大災害の結果を詳細に科学的に見通すことは何年にも亘って広範になされてきたし、確かな証拠を基礎にもつ。しかし、集団自殺行進をすると言われる特徴的なタビネズミのように、世界規模の核兵器による破滅への集団行動へ至った時に、もし解決があるならば、人間にふさわしい枠組を宗教のレベルで見出すことになる。Chernusが示唆するように、核兵器を理性的に評価する立場の人々はこの点を欠落している。

人間は全体的に豊かで、実りある生活のイメージを提供してくれる神話的な枠組を必要としている。この点は旧約聖書の預言者ホセアによって十分に理解されている。今日の我々は世界規模に匹敵する破壊に今直面してはいるが、しかし預言者は、「彼の」世界が危機に直面していて、それを同胞らに告げたのである。彼は人々を力強いヘブライ語のイメージをもつ「シャローム *shalom*」の中に据えたが、その言葉の本来の意味は「平和」

であった。しかも「シャローム」は、敵意がないというところに止まらず、人生が、健康においても精神的にも、社会的にもめぐまれているという豊かな概念をもつ。「シャローム」は、十分な食料、飲料、人間同士の豊かな交わりであり、人間の争いのない、という意味をもつ。ホセアの社会的、政治的天分は、「シャローム」の時が「他の」国々が軍備を捨てる時に来るというのではなく、「自分の」国がそのような武器をもはや所持しない時に来るということを示唆している点にある。

現代世界にあって、もちろん、ホセアの手紙は平和作りのために極端でラディカルな方法に聞こえるかもしれない。しかしホセアのビジョンは、有形・無形の偶像を避け、主人・奴隷の関係よりは夫婦の関係に近い神との契約の中にある人々に向けられている。ただ唯一このような「シャローム」のイメージが、過去60年以上の間世界に存続している全滅のイメージを覆（くつがえ）す時に、この地上での豊かな人間の未来にとっての真の希望となるであろう。現時点で、悪化する我々の世界は「シャローム」らしきものからほど遠い。人間の欲と軍備による安全という偶像は優勢である。それゆえ、教会の預言者の職務はそのような偶像に否を言うべきである。平和の君、イエス・キリストの福音は、神の恵みを通して新しい生のシンボルとして体を裂き、血を流されたことにあり、決して「国家の安全」という偶像的な枠組みを人間的に作り上げることを通してではない。最後に、私はホセア書2章16-23節の預言者の言葉をもって締めくくりたい。

それゆえ、わたしは彼女をいざなって、荒れ野に導き、その心に語りかけよう。

そのところで、わたしはぶどう園を与え、

アコル（苦悩）の谷を希望の門として与える。

そこで、彼女はわたしにこたえる。

おとめであったとき、エジプトの地から上ってきた日のように。

その日が来ればと、主は言われる。

あなたはわたしを、「わが夫」と呼び、

もはや、「わが主人（バアル）」とは呼ばない。

わたしは、どのバアルの名をも、彼女の口から取り除く。

もはやその名が唱えられることはない。

その日には、わたしは彼らのために、

野の獣、空の鳥、土を這うものと契約を結ぶ。

弓も剣も戦いもこの地から絶ち、彼らを安らかに憩わせる。

わたしは、あなたととしえの契りを結ぶ。

わたしは、あなたと契りを結び、正義と公平を与え、慈しみ憐れむ。

わたしはあなたとまことの契りを結ぶ。

あなたは主を知るようになる。

その日が来れば、わたしはこたえと、主は言われる。

わたしは天にこたえ、天は地にこたえる。